『大阿弥陀経』訳注（一）

辛　嶋　静　志

はじめに

阿弥陀仏とその仏国土（極楽）を主題とする経典は、早くも紀元後二〜三世紀には漢訳されている。すなわち、後漢の支婁迦讖訳とも呉の支謙訳ともいわれる『阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』（通称『大阿弥陀経』）がそれである。その後、この漢訳に基づきながらも新たに偈文などを加え、本願文の順序を変えた『平等覚経』（四世紀前後の訳と筆者は考えている）が現われた。この二本には願文が二十四しかないなど、色々な点で他の諸本よりも古い形態を示している。

さらに、一世紀ほど後に、新たに四十八願を説く『無量寿経』（魏の康僧鎧訳とされていたが、実際は五世紀前半の訳らしい）が翻訳された。この他、現存する漢訳として同じく四十八願を説く『無量寿如来会』（八世紀初め）と三十六願を説く『大乗無量寿荘厳経』（991年）がある。さらに、最近、従来知られていなかった漢訳の断片が発見された[1)]。それは法蔵菩薩の発願から本願文の一部に相当する。

梵本は *Sukhāvatīvyūha*（極楽の荘厳）という経名で、四十七願を説く。なお、梵本には約三十数部の写本が見つかっているが、最も古い二部の貝葉本でも十二世紀半ばの書写、その他は十七世紀以降に書写されたものである。チベット訳（*'Phags pa 'od dpag med kyi bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*［『聖なる無量光の荘厳』という大乗経］. 九世紀初め）は梵本の中でも貝葉本にほぼ一致する。

諸漢訳と梵本などを較べてみると、後のものほど量的に増し、そこに思想の発展あるいは消長の跡が見られる。阿弥陀仏の本願の数は初めの二漢訳では二十四だが、

1）百済康義「漢訳＜無量寿経＞の新異本断片」、『インド哲学と仏教 ── 藤田宏達博士還暦記念論集』平楽寺書店、1989年、373－394頁。

『無量寿経』や梵本などではその二倍になっている。また初めの二漢訳には般若思想の影響がはっきりとは認められないが、後のものには顕著に認められる。また、『大阿弥陀経』では「阿弥陀」は「無量の光をもつもの」（無量光）と定義されているが、「無量の命をもつもの」（無量寿）とは意味付けられていない。逆に阿弥陀仏が涅槃することも説かれているのである。

言語の面でも『大阿弥陀経』は梵本などよりも古い様相を示す。西北インドで成立したと考えられる浄土経典は、本来、その地方の方言で伝承されていたと考えられる。しかし時代とともに徐々に梵語化されてゆき、今日我々が梵語写本に見る様な形になったと考えられる[2)]。十二世紀にまで下る梵本に比べて、紀元後二〜三世紀に漢訳された『大阿弥陀経』が本来の方言の姿を留めていても不思議はない。実際、「阿弥陀」（訳注34参照）以外にも、「提恕竭羅」（*Dīpaṃkara*）の「恕」は原語で-p-が-v-となっていたことを示すし、「須摩提」（*Sukhāvatī*）という音写からは原語では**Suhāmatī* あるいは**Su'āmadī* とあったことを伺わせる。

従って思想の面でも言語の面でも古い姿を留めている『大阿弥陀経』は、単に『無量寿経』の異訳として片付けられるものではなく、浄土思想の原初の姿、本来的な様相に近づくための第一の資料なのである。しかし、いまだこの経に対する全面的な研究はなされていない。梵本の和訳・英訳が十種も出版されているのに対し、この経や『平等覚経』は不正確な訓点や書き下しが存するのみである。それらに言及する過去の諸論文を見ても、不正確な読解に基づく恣意的な解釈が多いのが実情である。

そこで私は、浄土仏教の原初の姿を研究する前段階として、まず、『大阿弥陀経』の現代語訳と注とを作成することにした。ここに発表するのはその成果の一部分である。国内外の漢語語彙・語法研究の成果をできる限り取り入れたつもりだが、まだ不明な箇所も少なくない。目下進行中の支婁迦讖訳諸経典の語彙・語法研究によって、不明な箇所が明らかになったり、改めるべき箇所も出てくるであろうが、その際は随時改めていこうと思う。

なお、今回訳出した部分は、曇摩迦菩薩（＝法蔵菩薩）が楼夷亘羅仏（＝世自在王仏）のもとを訪れ、その導きによって二十四願を立てたことと、その立てた願の内容とである（大正蔵第12巻、300c18〜302b20）。底本には高麗蔵所収本を用い、『中華大蔵経』第9巻所収の金蔵広勝寺本などを参照した。

2）　しかし、すっかり梵語化されたはずの梵語写本にも、本来の西北インド方言の形が潜んでいる場合がある。辛嶋静志「初期大乗仏典の文献学的研究への新しい視点」（『仏教研究』第26号［1997年］所収）参照。

なお、訳の部分は、真宗教学研究所助手（当時）の竹橋太氏が下訳を準備し、私が大いに手を入れたもので、すでに『教化研究』第117号（1997年、真宗教学研究所）に「『大阿弥陀経』願文訳」と題して発表したものである。

和訳

（大正蔵第12巻、300c18）

仏は阿難におっしゃった。

「次にまた、楼夷亙羅（ろういせんら）[2A)]という名の仏がおられ、世間で教えを垂れ、寿命は四十二劫であった。その時[3)]、世に大国王がいた。王は仏の教え[4)]を聞いて、歓喜し、はっきり理解し[5)]、すぐさま国と王位を捨てて、沙門となって[6)]、曇摩迦（どんまか）[7)]となのり、菩薩としての修行をなした。その人となりは才長け、智慧と勇敢さに関しては[8)]、世間の人々を凌駕していた。（彼は）楼夷亙羅仏の所へ行き、前に進んで仏に礼拝し、後ろに下がって膝立ちし合掌して[9)]仏に申し上げた。

『私は覚りをもとめ[10)]、菩薩としての修行をします。もし私が後に仏となったとき

---

2 A）　楼夷亙羅　Skt. *Lokeśvara*（世自在）に対応する音写語。

3）　乃爾時　漢訳仏典や魏晋代以降の文献には、「爾時」（その時）「爾日」（その日）「爾夜」（その夜）「爾夕」（その夕）という表現が見える。また、「乃」と「爾」は同義になることがあり（cf. ZXYL. 381）、実際、この二語を重ねた「乃爾」（「そのような、このような」）が漢訳仏典などには見える（例えば、本経でも「我未曾見三耶三佛光明威神乃爾」[300a24]）。従って、「乃爾時」で「爾時」と同様、「その時」という意味であろう。本経の他の個所にも「乃爾時有過去佛」（300b20）という表現がある。

4）　經道　辞書類には採られていないが、本経や他の古訳仏典に頻出する。例えば竺法護訳『正法華経』では skt. *dharma*（法），*dharma-paryāya*（法門、教説）に対応している（cf. Krsh [1998]. 226）。注(19)参照。

5）　開解　辞書類には出典例として唐代以降の文献が挙げられているが、古訳仏典から頻出する語。類義語を重ねた語である（cf. Krsh [1998]. 250）。

6）　行作　類義語を重ねた表現であろう。本経の別の箇所にも同じ使い方の例がある。「其人願欲往生阿彌陀佛國，雖不能去家，捨妻子，斷愛欲，行作沙門者，當持經戒，無得虧失」（310a16）。

7）　曇摩迦　Skt.*Dharmākara*（法蔵）に対応する音写。

8）　智慧勇猛　梵本には *prajñāvān adhimātraṃ vīryavān*（智慧あり、とても気力のある）とある。

9）　長跪叉手　「長跪」は両膝を地につけて腰を伸ばし、上半身を直立させて行う敬礼。中国古来の礼法である。「叉手」は外典では両手を胸の前で組んで、礼拝すること。仏典では胸の前で十指を合わせて合掌すること。

10）　欲求佛　「佛」はここでは「覚り」の意味。梵本には *aham asmi bhagavann anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbodhukāmaḥ*（世尊よ。私は無上等正覚を覚りたい）とあり、また、『平等覚経』には「發意欲求無上正眞道最正覺」とある。「佛」が「覚り」の意味で使われる例は『正法華経』「汝雖發意有無極慧，佛不可得」（大正9巻，106a12．梵本 *samyaksaṃbuddhatva*［等正覚たること］に対応）にも見られる（cf. Krsh [1998]. 144）。

には、八方上下の無数の仏のなかで最も尊く、智慧あり、勇敢で、頭の光明は（楼夷亙羅）仏の光明と同じく、果てしなく輝き照らし[11]、私の国土は自然の七宝からなり[12]、とてもすばらしいものでありますように[13]。

もし私が後に仏となったときには、私の名前を教え、みな聞いて、八方上下の無数の仏国に私の名前を知らないものがいませんように。無数の神々や人々や飛ぶ虫・這う虫など[14]、私の国に生まれて来るものが（301a）みな[15]菩薩や阿羅漢になり、（その数は）無数でいずれもどの仏の国よりも多いように[16]。このようなことが実現できるでしょうか？[17]』」

仏は阿難におっしゃった。

「楼夷亙羅仏は、彼が気高く賢明であり、願いがすばらしい[18]の知り、曇摩迦菩薩

11）　焔照　辞書類には採られていない表現だが、本経には多出する。

12）　自然七寶　本経における「自然」とは「人為によらず、自ずからかくある」「常識的な因果の法則を越えた、不思議な」という意味。末木文美士「『大阿弥陀経』における自然」（『宗教研究』第二四三号）を参照。

13）　極自軟好　「極自」の「自」は二音節にするために加えられた接尾辞でそれ自体は意味がない。同様の例は「空自」「唐自」「皆自」など後漢代以降の文献に見られる。佛典での用例は、Zhu. 157f.　を参照。仏典以外の例は森野繁夫『六朝詩の研究』「斉梁詩にみえる口語的表現」、簡文帝の詩にみえる『ー自』」（『広島大学文学部紀要』第32巻1号所収）を参照。注(30)参照。
「軟好」や「軟」は古訳仏典では「すばらしい、妙なる」という意味をもつようだ（cf.　Zhu. 207f.）。

14）　蜎飛蠕動　仏典以前から見える表現で、文字通りには「ひらひらと飛ぶ（虫）やごそごそと這う（虫）」の意だが、虫の総称。古訳仏典には頻出するが、概して梵本には対応がない。*sattva*（生き物）に対する「衆生」という訳語が定着する以前は、敷衍して「諸天・人民及蜎飛蠕動」（神々、人々や虫たち）やそれに類似した訳語をあてた様だ。

15）　悉皆　類義語を重ねた熟語。古訳仏典から見える表現（cf. Zhu 128；Krsh［1998］. 482）。

16）　令……　この「令」は使役ではなく、話者の願望を示す用法であろう。注43参照。

17）　寧可得不　この「寧可…不」「寧可…乎」「寧可…耶」は漢訳仏典や六朝時代の小説類に見える表現で「……できるだろうか」という推測の気持ちを示す（Zhu　91；　ZXYL.396；　Krsh［1998］. 304～305）。

18）　快善　辞書類には見られないが、本経では頻出する。例えば、「阿彌陀佛光明……光明中之快善也」（303a8）、「佛威神尊重，所説經快善」（312c28）など。この場合の「快」は「好い」という意味で、「快善」は類義字を重ねた表現である。『正法華経』に見える「快妙」（「以快妙香　及麻油香　若干種類　及華實香　所在安住　又嗅悉知　其於某處　有此衆香」［大正9巻、120b 23］）と同義であろう。

に（次のような）教え[19]を説かれた。

『[20]たとえば[21]、世界の大海の水を一人の人がますで量ろうとして、一劫の間、休まないなら、やはり汲みつくして空にし、底にある泥[22]に（まで）到達するが、人

19）　經　本経や他の古訳仏典には「経」が「経典」の意味ではなく「(仏の）教え、教説」の意味で使われている場合がある。例えば、支婁迦讖訳『道行般若経』「諸天子心念：“……　今是尊者善業所説經道了不可知。”善業知其心所念，語諸天子：“是經難了難了。……”（大正８巻、482c20）の「是經」はＡＡＡ.153.28.*yat Subhūtiḥ sthaviro bhāṣate pravyāharati deśayaty upadiśati*（長老スブーティの話し、語り、説き示すこと）に対応しているし、『正法華経』「所可演經」（大正９巻、74b10）の「經」はK.65.14.*dharma*(法)に対応している。

ここでも、樓夷亙羅仏が曇摩迦菩薩に説いた話は「経」と理解されている。

直後には、曇摩迦菩薩が仏の教えを聞いて、「二十四願經」をまとめたとあるが、これもこのような名前の「経典」があるのではなく、二十四の願文のことを指す。曇摩迦菩薩が阿弥陀仏になられたことから、翻ってその願文も「教え」と理解されたのであろう。

また、第七願には、神々や人々あるいは善男子、善女人のうち、あるものは菩薩行をなし、六波羅蜜経を実践する」という表現があるが、この「六波羅蜜経」もその様な経典があったのではなく、「六つの波羅蜜という教え」すなわち「六つの波羅蜜」そのものを意味している（同じ表現は本経の下巻［309c25］にも出る）。

また、本経には「阿弥陀仏が菩薩・阿羅漢や神々や人々に道智大経を詳しく説く」という表現がある（307a24）。これも「道智大経」という特定の経典があるのではなく、「さとりへの智慧に関する大いなる教え」あるいは、いわゆる「大乗」の教えの意味であろう（この点に関しては、辛嶋静志「法華経における乗（*yāna*）と智慧（*jñāna*）── 大乗仏教における *yāna* の概念の起源について ──」，田賀龍彦編『法華経の受容と展開』，京都，1993年［平楽寺書店］，168頁を参照）。

平川彰博士が本経の「六波羅蜜経」や「道智大経」を最古の大乗経典と考えるのは誤りである（『初期大乗仏教の研究』春秋社，1968：120f.）。

本経には「經道」（300c20，303c16，303c24など。注［４］参照）、「經法」（302b17，315b25，315c16など。注［106］参照）、「經戒」（301b17，301b29，316a11など）という表現がでるが、これらの「経」も「(仏の）教え、教説」という意味である（cf. Krsh［1998］. 226～228）。

20）　言　「言」は「曰」と同じく、「念」「白」「対」「報」「問」「語」「説」などと連用されると、単に引用符号のような機能をもつ。ここもその例。

21）　譬如天下大海水……　この例えは本経、『平等覚経』（280c22f.）、『無量寿経』（267b29f.）にのみあり、梵本をはじめ他の諸本にはない。また本経の別の箇所には、「大海の水は量り知れるが、仏智は量り知れない」という文脈で同じ例えが見える（309a28f.）。これは『平等覚経』（291a17f.）に踏襲されているだけで、他の諸本にはない。

22）　涅　「涅」は「泥」の異体字。『無量寿経』には「海の底まで水を汲み尽くして、妙宝を手に入れる」とある。

がひたすら道[23]を求める場合はどうだろうか[24]。一体到達できないだろうか？[25]たゆまず求めて精進し続ければ、必ず心に抱いている願いを成就することができるはずだ[26]。』

曇摩迦菩薩は楼夷亙羅仏がこのように教えを説かれたのを聞き、飛び上がらんばかりに大喜びした。そこで仏は、二百十億の仏国の神々や人々の善悪と国土の美醜を選んで（説き）、心中の願を選び取らせた[27]。

23）道　ここでは「道」は「さとり」の意味と思われる。Skt. *bodhi* が「道」と訳される例は古訳経典では少なくない（具体例は Krsh [1998]. 86～87を見よ）。

なお、本経の「道」は「いう」「道路」の意味以外に次のような意味で使われている。

（1）「人の踏み行うべき正しい道」の意味。例えば、「居家修善爲道」（311b 3）、「作善爲道」（312a24，315a 6，316a 5）、「爲道作善」（301b17）、「如是世人，不信作善得善，不信爲道得道」（312b13）、「不知作善，悪逆不道」（313c10）、「都無義理、不知正道」（315b21）。

（2）「道理、ものごとの筋道」の意味。例えば、「善悪之道」（312a26，312b19）、「生死勤苦善悪之道」（315a16）、「死生之道」（312b21）、「不知作善，悪逆不道，受其殃罰，道之自然」（313c11）、「轉相承受善悪毒痛，身自當之，無有代者，道之自然」「殃咎引牽，當値相得。自然趣向，受過謫罰。……　當是之時，悔復何益，當復何及？　天道自然不得蹉跌」」（314c 15）。

（3）また『老子』や『荘子』など道家での「道」の意味、すなわち「根源的、絶対的真理」の意味と考えられる例もある。すなわち、「自然之道」（311b22，316a21）。

（4）「輪廻における生存の状態、境界」（skt.*gati*）という意味の場合。例えば、「人道」（302a 17，308b8など）、「悪道」（304c14，　312c2など）、「五道」（313a21，28など）「泥犂・禽獸・薜荔・蜎飛蠕動悪苦之道」（315c4）

（5）「さとり」（skt.*bodhi*）の意味。「求道不休、會當得之」（311 a 16）。

（6）「覚りあるいは涅槃へいたる道、修行」の意味。例えば、「説經，行道」（302a8など。注［85］参照）、「泥洹之道」（313 a 25，316 a 22など）、「無爲之道」（309c25）、「度世泥洹之道」（315c2）、「度世無爲泥洹之道」（315b25）、「菩薩道」（309c25，313a23など）、「阿那含道」（305c27，317c18）、「阿羅漢道」（305c27，317c19）、「開示大道，教語生路」（313a1）、「佛爲八方上下諸天・帝王・人民作師，隨其心所欲願大小，皆令得道」（313a14）。「佛道」（301c8）

（7）「經道」（300c20，303c16，306c22など。注4参照）は「仏の教え」を意味している。

しかし、はっきりと分別できない場合も少なくない。

24）何如　大正蔵には「可如」とあるが、単なる印刷ミス。「何如」は文末に置かれて「……はどうか」「……をどう思うか」という、相手に意見を尋ねる疑問文を造る。先秦の文献から見える用法。なお、『平等覚経』には「何而」とあるが、「如」と「而」が交替する例は先秦の文献からずっと見られるが、これは音が近いためと思われる。

25）當不可得乎？　疑問文に用いられた「當」（「はた」と訓読する）は、「一体」「そもそも」と疑問の語気を添えるに過ぎない。本経の他の箇所にも、「誰當能知信其者？」（一体、誰がそれを知り、信じているか。309a11）などの例がある。Krsh (1998). 80には『正法華経』に見える例を列挙している。

26）會當　　「會當」は類義字を重ねた表現。後漢以降の仏典や外典に見える（Cf. Zhu 204；ZXYL.253～254；Krsh [1998]. 186）。

27）爲選擇心中所欲願　この「爲」の意味は分かりにくい。使役の働きをもつ例が、先秦時代の文献のみならず、三国魏代や宋代の文献に見られるので（HD, vol. 6, 1106頁）、一応「させる」の意味でとった。

樓夷亙羅仏[28]が教えを説き終えると、曇摩迦はすぐさま心を集中して、すぐ超人的眼力（すなわち）（一切を）はっきり見る視力[29]を得、自分の眼で二百十億の仏国の神々や人々の善悪と国土の美醜をすべて見た[30]。そして心中の願を選び、すぐさまこの二十四願の教え[31]をまとめて[32]、大事に実践した。勇ましく精進し、（この願の成就を）懸命に求めた。このように無数劫の間に、師事し供養した過去仏もまた無数であった。

曇摩迦菩薩はそののち仏となって[33]、阿弥陀仏[34]と名乗った。最も尊く、智慧あり、勇敢で、その光明は比類ない。いま現在おられる国土はとてもすばらしい[35]。（阿弥陀仏はこの娑婆世界から見て）他方の別の国で八方上下の無数の神々や人々や飛ぶ虫

28）樓夷亙羅佛　高麗蔵本だけ「夷亙羅佛」とあり、他の諸本は「樓夷亙羅佛」とある。金蔵本はあきらかに高麗蔵本と同系の版木を使い、一行十四文字で統一されているが、ここの部分は「樓」の字を押し込んで一行十五文字になっている。

29）天眼徹視　この表現は本経の経末にも出る（317c17）。「天眼」は漢訳仏典から始まる言葉。狭義には、自他の未来のありかたを見通す能力。広義には、あらゆる世界のことがらを見通す超人的な眼力。「徹視」は辞書類にはとられていない。「洞視」（注［87］参照）と同じ意味。

30）悉自見　一応「自」は「自分で」と解釈したが、あるいは「悉自」で一語かも知れない。その場合、「自」は二音節にするために加えられた接尾辞（注［13］参照）。本経の「阿彌陀及諸菩薩・阿羅漢皆浴已，悉自於一大蓮華上坐」（305c4）、「都共人人悉自於一大蓮華上坐」（311b17）の「悉自」はその例。

31）二十四願經　二十四の願文のことを指す。注(19)を見よ。

32）結得　このように動詞のすぐあとに「得」が置かれる形は、後漢代から現われる（志村良治『中国中世語法史研究』、三冬社1984，71頁、ZXYL.120f. 参照）。

33）自致得作佛　一応、「致得」で「（仏に作るという状態に）至った」と解釈した。しかし、「自致得，作佛」で「成就して、仏になった」という意味かも知れない。なお、「致得」の例は『正法華經』に見える：「自致得佛」（大正第９巻、103a４）、同「自致得佛道」（103a14）。しかし、「得」は動詞「致」（［ある結果を］まねく、獲得する）とその結果を示す動詞「作」（なる）を結ぶ助詞かもしれない（この様な助詞「得」の用法についてはZXYL.120f. 参照）。

後には「今自致作佛，悉皆得之，不亡其功也」（302b19）とある。

34）阿彌陀　「阿弥陀」に対応する梵語には、*Amitābha*（無量光仏）と *Amitāyus*（無量寿仏）がある。おそらく、この経典が成立した西北インド方言では、Amitabha は**Amidāha*，－*āhu*，－*ā'u*，－*āyu* となり、これが「阿弥陀」と音写され、さらに－*āhu*，－*ā'u*，－*āyu* という形が梵語－*āyus*（寿命）に由来すると解釈されて *Amitāyus* という呼称が成立したと筆者は考えている。従って、「無量の光をもつもの」が本義であり、「無量の命をもつもの」という名称は、誤解にもとづく二次的なものと思われる。本経に見える「阿弥陀」は概して「無量の光をもつもの」と定義されている。また、本経には阿弥陀仏が涅槃することが説かれており（309a20）、決して「無量の命をもつもの」ではないのである。

なお、『長阿含経』に見られる「闍尼沙」（skt. *Jinarṣabha,* Pa. *Janesabha*）という音写でも、「阿弥陀」の場合同様に、語末の－bha が音写されていない。この場合も、－bh－が－h－と変化し、さらに－h－が発音されなかったか、脱落したのであろう。この現象は西北インド方言であったガンダーラ語に見られる（辛嶋静志『長阿含経の原語の研究 ── 音写語分析を中心として」（1994，平河出版社）29頁参照。

35）快善　注(18)参照。

・這う虫などに教えを授け、（彼等は）みな憂いを越え[36]苦しみから解脱する。」

仏は阿難におっしゃった。

「阿弥陀仏は菩薩であったとき、常にこの二十四願を大事に実践し、珍しい宝のように大切にし、大事にし、しっかり保ち、遵守し[37]、ひたすらに一心にそれを実行した[38]。他の人々を超絶しており、はっきりとぬきんでていて、及ぶものは誰もいなかった。」

仏はおっしゃった。

「二十四願とは何であるかというと。

第一願[39]：『もし私が仏になったなら、私の国には、地獄[40]・鳥獣・餓鬼[41]・飛

36）過度　類義字を重ねた語（「度」は「渡」と同じ意味）。すでに先秦の文献から見える。仏典では「（苦しみ、輪廻を）脱する」あるいは「（衆生を苦しみ、輪廻から）救済する」という意味で使われる。梵語√*tṛ*（渡る、過ぎる）、その使役形 *tārayati*（救済する）に対応し、「度脱」という表現に類似する。本経の経題にも「過度人道」という表現が含まれる。また、『無量寿経』の「過度生死　靡不解脱」（267b2）という表現も参照。

37）恭順　本経の諸本には「恭慎」（慎重な）とあるが、これでは分かりにくい。『平等覚経』に「恭順」とあるので、この読みを採った。「慎」と「順」の混同は古くから見られるが、これは「慎」が古くは「愼」と書かれ、これが「順」に似ているからと考えられる。

38）精禪從之　本経の高麗蔵本と金蔵本以外は「精禪行之」とある。ここの「從」は「おこなう、する」の意味。「精禪」の意味は明確でない。『平等覚経』は「精進禪行之」と改めている。「精」は「専一する」するという意味であろう。「禪」は梵語 *dhyāna*（禅）の俗語形の音写だが、名詞にも動詞にも使われる。「精禪」で「ひたすら心を集中する」という意味であろうか。

39）第一願……　『平等覚経』・『無量寿経』・梵本の第一願に対応する。本願が成就した様子を描写する所謂成就文は本経303c1f.

40）泥犂　skt.niraya（地獄）の音写。

41）薜荔　skt.preta（餓鬼）の音写。

ぶ虫・這う虫など[42]がいませんように[43]。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第二願[44]：『もし私が仏になったなら、私の国には、女性がいませんように。女性が私の国に生まれようと願ったら、すぐさま男性になりますように。無数の神々や人々や飛ぶ虫・這う虫などが私の国に生まれる時は、みな、（301b）七宝でできた池（に生える）蓮の花のなかにすっと生じる。大きくなれば、みな菩薩、阿羅漢になり、その数はまったく数え切れない。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第三願[45]：『もし私が仏になったなら、私の国土は思い通りの七宝からなり[46]、広さがとても大きく、果てしなく広々としていて、とてもすばらしいものであります[47]

42）蜎飛蠕動之類　注(14)参照。

43）令　以下願文に出る「令……」は、梵本の願望法（Optative）に対応しており、「……でありますように」という話者の祈願を表わしている様だ。この用法は辞書類には見られないが、古訳・旧訳仏典にはしばしば見られる。例えば、後漢の安世高訳『舎利弗悔過経』「某等……願従十方諸佛，求哀悔過。令某等今世不犯此過殃。令某等後世亦不被此過殃」（私たちは十方の諸仏にお願いし、哀れみを求め、懺悔します。どうか私たちがこの世でこの過ちを犯しませんように。どうか私たちが後の世でこの過ちの報いを受けませんように。大正24巻、1090b13）。また、西晋代の竺法護訳『正法華經』「吾建要誓至誠之願。如我所言隨順不虚，我此手臂成紫金身。令我手臂平復如故」（私は真実［の言葉］の誓願をたてます。もし私の言葉が正しくて偽りがなければ、わたしのこの腕が紫金に変わり、どうか私の腕が元どおりになりますように。大正9巻、126a17；cf. Krsh［1998］. 273）。後者は鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』の対応箇所でも「令我兩臂還復如故」（私の両腕がまた元どおりになりますように。大正9巻、54a6）とある。また、同じく『正法華經』の「吾等當成　世之明父　汝黨如是　皆得上慧　斯諸衆生　悉令如此　又如世尊　爲法之眼」（私たちは世間の賢父となりましょう。あなたたち［＝仏たち］はこのようにみなすぐれた智慧を得られました。この衆生たちも同様になり、また世尊のように法の眼［をもつもの］となりますように。大正9巻、93b25；cf. Krsh［1998］. 273）は『妙法蓮華経』の対応箇所では「我等及營從　皆當成佛道」（私たちと侍者たちはみな仏のさとりを完成しましょう。大正9巻、26c4）とある。

また「使」が同じ用法で使われる例が『長阿含経』に見られる。すなわち、「當使汝等壽命延長無病無痛」（どうかおまえたちが長生きし、無病息災であるように。大正1巻、24c25）、「願使弊宿今世後世不獲福報」（どうか、弊宿がこの世でも、後の世でも、よい報いを得ませんように。46c25）、「使汝帝釋及忉利天壽命延長快樂無患」（どうかおまえたち帝釈や三十三天の神々が長生きし、楽しく憂いがないように。63b10）、「當使汝受（*v. l.* 壽）命延長現世安隱。使汝弟子白癩得除」（どうか、おまえの寿命が長く、この世で安穏にくらせますように。おまえの弟子の白癩が治りますように。88a12）。

44）第二願……　『平等覚経』にはこの願文がない。前半は『無量寿経』・梵本の第三五願に対応する。後半は他の諸本に対応なし。成就文は本経303c8, 14, 304b16f., 304c17, 310a7, 311b17.

45）第三願……　『無量寿経』三二願に対応するか。『平等覚経』・梵本に対応なし。成就文は本経303b17f.?, 310a10f.

46）自然七寶　注(12)参照。

47）極自軟好　注(13)参照。

ように。住まい、衣服、飲食はみな[48]自然に（現われ）、第六天（他化自在天）の王[49]の住む所の様でありますように[50]。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第四願[51]：『もし私が仏になったなら、私の名前が、八方上下の無数の仏国のどこでも知れわたりますように。仏たちがみなそれぞれ比丘たちの大会座（えざ）において、私の功徳と国土の素晴らしさを説き、神々や人々や飛ぶ虫・這う虫などが、私の名前を聞いて、みな慈しみの心をいだき、飛び上がるほど喜びますように。（そして）みなわたしの国に生まれますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第五願[52]：『もし私が仏になったなら、八方上下の無数の神々や人々や飛ぶ虫・這う虫などで、前世に悪いことをした者が、私の名前を聞いて私の国に生まれたいと思い、すぐさま正しさに返り、過ちを悔い、正しい行いをなし、そして教えに基づく戒[53]をたもち、絶えず私の国に生まれることを願いますように。寿命がつきて誰ももはや地獄・鳥獣・餓鬼に（生まれ）ず[54]、そのまま私の国に生まれ、（彼らの）願い通りになります[55]ように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第六願[56]：『もし私が仏になったなら、八方上下の無数の仏国の神々や人々あるいは善男子、善女人が、私の国に生まれたいと思い、そのゆえに[57]、おおいに善をなしますように。布施をし[58]、塔のまわりをめぐり、香を焚き、花を散らし、灯火を燃や

48）都皆　　類義字を重ねた語。Cf. Krsh（1998）. 105.

49）第六天王　　欲界の下から第六番目の天である他化自在天を「第六天」という。

50）比如　　高麗蔵・金蔵には「皆如」とあるが、その他の刊本により改める。

51）第四願……　『平等覚経』・梵本の第十七願に対応する。前半は『無量寿経』の第十七願、後半は十八願に対応する。

52）第五願……　『平等覚経』・『無量寿経』の第二十願に対応する。

53）經戒　　注(19)およびKrsh（1998）. 228参照。

54）不復更泥犂禽獸薜荔　　原文には「不復泥犂・禽獸・薜荔」とあるが、『平等覚経』に「不復更三惡道」（281c8）とあるのに従い、「更」を補う。本経の第八願に「不更泥犂・禽獸・薜荔」とあるのを参照。「更」は「（苦しみを）受ける」という意味。本経では「悪い境涯に陥る」の意味で使われる。

55）在心所願　　古訳仏典には「在」が「随」の意味で使われる例が多い。この用法は仏典以前から見える（王瑛『詩詞曲語辭例釋』[増訂本]，北京1986［中華書局]、303～304頁；WNCL.409）。

56）第六願……　『無量寿経』の第十九願に部分的に対応する。『平等覚経』に対応なし。成就文は本経310ａ15ｆ.

57）用我故　　原文の「用我故」では意味が通じない。「用是故」の誤った伝承か。

58）分檀布施　　「檀を分け、施しをほどこす」「檀」はskt.*dāna*（“施し”）の音写。従って「分檀」と「布施」は同義。

し、様々な綾絹を（塔に）懸け、沙門に食事を与え、塔を建て[59]、愛欲を断じ、きちんと斎戒[60]をたもち、昼も夜も一日中絶えず、ひたすら私を念じるものが、みな私の国に生まれて菩薩となりますように[61]。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第七願[62]：『もし私が仏になったなら、八方上下の無数の仏国の神々や人々あるいは善男子、善女人のうち、あるもの[63]は菩薩行[64]をなし、六つの波羅蜜の教え[65]をおしいただいて実行し、（また）あるいは沙門になって、教えに基づく戒を破らず、（301c）愛欲を断じ、きちんと斎戒をたもち、昼も夜も絶えず、ひたすら私の国に生まれたいと念じますように。彼らの命がまさに尽きようとする時に、私は（私の国の）菩薩や阿羅漢と一緒に飛んで行き、迎えましょう。（彼らは）すぐさま私の国に生まれ、不退転の菩薩[66]となり、智慧あり、勇敢なものとなりますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第八願[67]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩たちが他の仏の国に生まれようと思いますように。（彼等は）誰も地獄・鳥獣・餓鬼に生まれませんように[68]。みな仏のさとり[69]を得ますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になり

---

59) 起塔作寺　後には「作佛寺，起塔」と出る（310b18, 310c12）。「塔」はskt.*stūpa*の俗語形（*thūpa, thūva*）の音写。本経の「寺」「佛寺」はskt.*vihāra*（“精舎”）の訳語の可能性が全くないわけではないが、おそらく*stūpa*の漢訳語であろう。従って「起塔」と「作（佛）寺」は同義。*stūpa*の訳語としての「寺」については、平川彰『初期大乗仏教の研究』563f.；Krsh (1998). 430を参照。

60) 齋戒　神を祭るとき、心身を清め、また飲食を慎み、汚れをさること。『孟子』離婁下「雖有悪人、斎戒沐浴、則可以祀上帝」。ここでは、skt.*brahmacarya*（淫欲を断ち、性交を慎む行）の訳語と考えられる。

61) 齋戒清淨，一心念我，晝夜一日不斷絶，皆令來生我國，作菩薩　「齋戒清淨，一心念我，晝夜一日不斷絶，皆令」は高麗蔵にはないが、金蔵などにより補う。

62) 第七願　『無量寿経』の第十九願に対応する。成就文は本経309c24f.

63) 有　「或」に同じ。古典にも例は多い（cf. HD, vol. 6, 1142頁）

64) 菩薩道　注(23)を参照。

65) 六波羅蜜經　「經」が「経典」ではなく「教え」の意味であることは、注(19)を見よ。

66) 阿惟越致菩薩　「阿惟越致」はskt. avivartika, avivartya（“[覚りへの修行階梯から] 退かない”）に対応する音写。

67) 第八願　『無量寿経』の第二願に対応する。成就文は本経311a14～15.

68) 令我國中諸菩薩欲到他方佛國生，皆令不更泥犂、禽獸、薜荔　最初の「令」はここでは「もし」の意味かも知れない。そうすると「もし私の国の菩薩たちが他の仏の国に生まれようとしても、（彼等は）誰も地獄・鳥獣・餓鬼に（生まれ）ませんように」。なお、『平等覚経』には「從我國去，不復更地獄・餓鬼・禽獸・蠕動」（私の国から去って［も］もはや地獄・餓鬼・鳥獣・這う虫になりません）とある。

69) 佛道　注(23),Krsh (1998). 144～146を参照。

ましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第九願[70]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩・阿羅漢の容姿がみな端正であり、清らかですばらしく、みな同じ（肌の）色で、まったく一様の姿であり、あたかも[71]第六天の神々[72]のようでありますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十願[73]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩・阿羅漢が心に思うことがみな同じで、言おうとすることは、お互いあらかじめその意を知りますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十一願[74]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩・阿羅漢はみな淫らな心を持たず、女性に思いをかけることがまったくなく、（また）怒りや愚かさをもつものがまったくいませんように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十二願[75]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩・阿羅漢はみな敬愛しあい、決して憎しみ[76]あいませんように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十三願[77]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩がみんなで八方上下の無数の仏を供養しようと思いますように。みな飛んで行って、すぐさま（諸仏のもとに）着きますように。（彼等が、）自然に（生じる）あらゆる種類の物を得たいと思えば、なんでもすぐさま目の前に現われ，それで仏たちを供養して、（仏たちを）みな[78]一巡りしたあと、午前のうちに私の国に飛んで戻って来ますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十四願[79]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩や（302a）阿羅漢たちが食

70）第九願　『無量寿経』の第三願、第四願に対応する。成就文は本経311a13, 301c12f.
71）比如　高麗蔵・金蔵には「皆如」とあるが、その他の刊本により改める。
72）第六天人　「第六天」は他化自在天のこと（注［49］参照）。「天人」は神々の意味。
73）第十願　『無量寿経』の第八願に対応する。成就文は本経308b7, 303c15.
74）第十一願　『無量寿経』の第十願に対応する。成就文は本経303c22.
75）第十二願　『無量寿経』に明確な対応なし。成就文は本経303c18.
76）嫉憎　同義字を重ねた語。辞書類に採られていない。
77）第十三願　『無量寿経』の第二三願に対応する。成就文は本経306a1f.
78）悉皆　Cf. Krsh (1998). 482.
79）第十四願　『無量寿経』に対応なし。成就文は本経303c 5～8, 307a4～20.

事をしようとするとき、自然に生じた七宝の鉢の中に自然に生じた様々な味の食べ物が目の前に現われ、食べ終われば、すっと消えますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十五願[80]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩たちの体はみな紫磨金[81]の色をしていて、（仏のもつ）三十二の身体的特徴と八十の（身体的）美点[82]をもっていて、みな仏のようでありますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十六願[83]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩や阿羅漢たちが語るとき、（その声が）三百の鐘の音[84]のようであり、仏と同じように教えを説き、仏道を行います[85]ように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十七願[86]：『もし私が仏になったなら、（他の）仏たちよりも十倍すぐれて（一

80）第十五願　『無量寿経』の第三願、第二一願に対応する。成就文は本経311a11～13.

81）紫磨金　中国では紫色を帯びた最上の黄金を「紫磨」「紫磨金」「紫金」というが（例えば、漢代、孔融『聖人優劣論』「金之優者，名曰紫磨，猶人之有聖也」）、仏典では skt. *jambūnada*（ジャンブー河産の金。一般に金）*suvarṇa*（金）などの訳語に使われる。なお、中国では紫色は天上世界・神仙世界の最高の色とされた（福永光司「天皇と紫官と真人 ── 中国古代の神道 ──」、『道教思想史研究』、岩波書店、一九八七年、所収）。仏身や菩薩身が金色であることは、大乗経典に頻出する。例えば、『妙法蓮華経』提婆達多品、「我具足六波羅蜜・慈悲喜捨・三十二相・八十種好・紫磨金色・十力・四無所畏……」（大正九巻、三四下二七）。その梵本には *suvarṇa-varṇacchavitā*（金色の肌をしていること）とある。

82）三十二相・八十種好　「三十二相」は skt. *dvātriṃśan-mahāpuruṣa-lakṣaṇāni*（偉大な人の三十二の身体的特徴）の訳語。「八十種好」は Skt.*aśīty-anuvyañjānani*（[仏の身体に具わる] 八十の副次的特徴）の訳語。併せて「相好」という。詳しくは、中村元著『仏教語大辞典』などを参照。

83）第十六願　『無量寿経』に対応なし。成就文は本経307c2～4.

84）如三百鐘聲　本経の他の箇所でも同じ表現がでる：「諸菩薩・阿羅漢……其語言音響如三百鐘聲」（303c17）、「諸菩薩・阿羅漢中，有誦經者，其音如三百鐘聲」（307c3）。他の文献での用例は未見。

85）説經行道　この箇所、『無量寿経』に「演説一切智」とあり、梵本に *sarvajñatāsahagataṃ dharmāṃ kathāṃ*（*v.l. dharma-kathāṃ*）*kathayeyur*（一切智者［＝仏］たることや法について語ろう）とある。「説經，行道」という表現は、この後、第十八願にも出るが、その他の箇所でも「阿彌陀佛所願德重，其人作善故，論經，語義，説經，行道」（303c28）、「未得阿惟越致菩薩者，即得阿惟越致，各自説經，行道，悉皆得道」（305c29）などと出る。「經」が「教え」の意味になることについては、注(19)を参照。

86）第十七願　『無量寿経』の第六願、第七願、第九願に対応する。

切を）見通し、（あらゆる音を）はっきり聞き分け、飛行することができます[87]ように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十八願[88]：『もし私が仏になったなら、智慧で教えを説き、仏道を行ずることに関して（他の）仏たちより十倍すぐれていますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第十九願[89]：『もし私が仏になったなら、八方上下の無数の仏国の神々や人々や飛ぶ虫・這う虫などが、（生まれ変わって）みな人間[90]になり、（さらに）みな辟支佛[91]・阿羅漢になって、みな坐禅して心を集中し、一緒に私の壽命が幾千億万劫歳であるか計り知ろうとしても、誰も命の長さを知り尽くす[92]ことができませんように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第二十願[93]：『もし私が仏になったなら、八方上下のそれぞれの（方角の）千億の仏国の神々や人々や飛ぶ虫・這う虫などが、（生まれ変わって）みな辟支佛・阿羅漢になって、みな坐禅して心を集中し、一緒に私の国の菩薩・阿羅漢の数を数えて、何千億万人いるか知ろうとしても、誰もその数を知ることができませんように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第二十一願[94]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩・阿羅漢の寿命が無数劫でありますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

87）洞視徹聽飛行　　中国の後漢代以降の文献でも方術の士がこの様な能力を持つと述べられている。『抱朴子』論仙篇「自不若斯，則非洞視者，安能覿其形？　非徹聽者，安能聞其聲哉？」。仏典では、天眼通（自他の未来のありかたを見通す能力。あらゆる世界のことがらを見通す超人的な眼力）、天耳通（あらゆる音声を聞き分けることのできる能力）、神足通（どこにでも行ける自在の力）に対応する古訳語としてこれらの表現が見られる。

88）第十八願　　『無量寿経』の第二五願に対応するか。

89）第十九願　　『無量寿経』の第十三願に対応する。成就文は本経308c29～309a11.

90）人道　　仏典では「人間としての生存」の意味。注(23)参照。

91）辟支佛　　Skt. *pratyekabuddha* の音写。

92）能極知壽　　「極知」は「知り尽くす」の意。この語の用例は唐代、張守節『史記正義』諡法解「極知鬼神曰靈」がある。なお、『平等覚経』の対応箇所には「能知寿涯底」（寿命のはてを知ることができる）とある。梵本には *āyuṣpramāṇaṃ paryantīkṛtaṃ bhaved*（寿命が尽きることがある）とある。

93）第二十願　　『無量寿経』の第十四願に対応する。成就文は本経308c29～309a11.

94）第二十一願　　『無量寿経』の第十五願に対応する。

（302ｂ）第二十二願[95]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩・阿羅漢はみな智慧あり、勇敢で、彼らが億万劫の過去世以来、過去の生存[96]においてなした善悪の行為を自分で知っており、将来のことも[97]果てしなく知っており、みな、十方の過去・未来・現在のことを見通し、はっきり知りますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第二十三願[98]：『もし私が仏になったなら、私の国の菩薩・阿羅漢はみな智慧あり、勇敢で、頭の頂きにはみな光がありますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』

第二十四願[99]：『もし私が仏になったなら、私の頭の頂きの光はとてもすばらしく、太陽や月の光より百千億万倍もすぐれていて、他の仏をはるかに凌駕していますように。（私の）光明は無数の世界[100]を輝き照らし、暗闇のところは常に[101]すっかり明るくなります（ように）。神々や人々や飛ぶ虫・這う虫などは私の光明を見て、みな慈しみの心をいだいて正しい行いをなし、みな私の国に生まれますように。この願が成就すれば、そのとき（私は）仏になりましょう。もし成就しなければ、決して仏にはなりません』」[102]

仏は阿難におっしゃった。

95）第二十二願　『無量寿経』の第五願に対応する。成就文は本経302b23～25.

96）宿命　「宿命」という漢語は漢訳仏典から始まるようである。「宿」には「宿怨」「宿志」というように「かねてからの、ひさしい」という意味がある。これから派生して仏典では、「宿縁」「宿善」「宿業」「宿世」「宿願」などと、もっぱら「過去の生存以来の、前世からの」もしくは「過去世の、前世の」の意味で用いる。従って「宿命」とは「過去世におけるいのち、過去での生存」の意味。

97）却　この「却」は「後に、将来」の意味。本経の他の箇所にもこの意味の「却」が見られる。すなわち、「其諸菩薩・阿羅漢……自知前世所從來生億萬劫時宿命善悪存亡，現在却知無極」（303ｃ24）、「佛智亘然甚明，探古知今，前知無窮，却覩未然，豫知無極」（309b23）。他の古訳仏典の例は、ZXYL. 432；Krsh（1998）. 345を参照。

98）第二十三願　他の諸本に対応なし。

99）第二十四願　『無量寿経』の第十二願に対応する。成就文は本経302ｂ20ｆ.

100）諸無央數天下　本経では「天下」は概して「世界」（skt. *loka*）の意味で使われている様である（例えば、「今我出於天下作佛」[300b17]）。ただし、「四天下」（307c18，21）という表現は、一世界を構成する四つの大陸（skt. *dvīpa*）のことであり、「四天下」で「全世界」という意味になる。ここの「諸無央數天下」というのは他方仏国も含めた「無数の世界」という意味であろう。

101）常　本経の諸本には「當」とあるが、『平等覚経』には「常」とあり、また本経でも後には「焰照諸無數天下，幽冥之處皆常大明」（303a10）とあることから、「常」に改める。本経や『平等覚経』を含め古訳経典には「當」「常」「尚」の交替例がいくつか見られるが、これは字体が似ているためか、あるいは「當」「常」が略して「尚」と書かれたためによると考えられる。

102）本経と『平等覚経』には重誓偈に相当する部分が欠けている。

「阿弥陀（如来）は菩薩であった時、常にこの二十四願を大事に実践し、布施をし[103]、仏教の戒め[104]を守り、耐え忍び、精進し、心を集中し[105]、智慧（をもち）、志願は常に揺るがず、教え[106]を破らず、（この願の成就を）たゆみなく求めつづけ、いつも独りでいて、国と王位を捨て、財産と女色を捨て去り、ひたすらに[107]願（の成就）を求め、好き嫌いがなく[108]、無数劫にわたって功徳を積み、いまや仏となり、全てを成就して、その功徳を無駄にしなかったのである。」

略号表

注で使用した略号は次の通り：

AAA＝*Abhisamayālaṃkār'ālokā, Prajñāpāramitāvyakhyā, the Work of Haribhadra,* together with the text commented on, ed. U. Wogihara, Tokyo 1932, The Toyo Bunko ; Reprinted Tokyo 1973, Sankibo Buddhist Store Ltd.

HD＝漢語大詞典，全13冊，上海，1986～1994.

K＝H. Kern and B. Nanjio, *Saddharmapuṇḍarīka*, St. Petersburg 1908－12 (Bibliotheca Buddhica X)

Krsh (1998)＝*A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典,Seishi Karashima, Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I).

WNCL＝蔡鏡浩『魏晉南北朝詞語例釋』，1990（江蘇古籍出版社）

Zhu＝朱慶之『佛典與中古漢語詞彙研究』，台北1992（文津出版社）.

ZXYL＝董志翹・蔡鏡浩『中古虚詞語法例釋』，長春1994（吉林教育出版社）.

103）分檀布施　注(58)を参照。以下、いわゆる六波羅蜜（布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の完成）を列挙している。

104）道禁　ここではskt. *śīla*（戒）に対応する。この語は本経の別の箇所にも出る。すなわち「若曹於是益作諸善，布恩施德，能不犯道禁忌，忍辱，精進，一心，智慧，展轉復相教化，作善爲德」(315c14)、「教勅率衆爲善，奉行道禁」(316 a 17)。

105）一心　ここでは、skt. *dhyāna*（精神を統一すること。禅定）に対応する。

106）經法　古訳仏典ではskt.*dharma*（法）や*sūtra*（経）の訳語として出る（cf. Krsh [1998]. 226～227)。ここの梵本には*śukla-dharma*（清浄な法）、『無量寿経』には「清白之法」(269 c 15）とある。注(19)参照。

107）精明　「純粋な真心で、ひたすらに」という意味であろう。本経の別の箇所に同様な意味の例がある。すなわち、「令我曹得度脱者，皆是佛前世求道時，勤苦學問，精明所致」(313a9)、「精明至心，求願不轉」(313b 9)、「皆各自精明求索心所欲願」(313b21)、また『無量寿経』にも「人能自度，轉相拯濟，精明求願，積累善本」(275c8）という例がある。仏典以外では、漢代、班固『白虎通』雑録「齋者，言己之意念專一精明也」という例を参照。

108）適莫　「好むことと憎むこと」あるいは「人に対して親切であったり不親切であること」。『論語』里仁篇「君子之于天下也，無適也，無莫也」とあるのに基づく表現。本経の別の箇所にも出る。すなわち「其人願欲往生阿彌陀佛國，雖不能去家、捨妻子、斷愛欲、行作沙門者，當持經戒，無得虧失，……如是法者，無所適莫，不當瞋怒」(310a15f.)、また『無量寿経』にも「生彼佛國諸菩薩等……隨意自在，無所適莫，無彼無我，無競無訟」(273c23f.）という例がある。